

「自分がいる場所」ワークショップ

九州大学芸術工学研究院 知足院美加子

本ワークショップは、**場と自分との精神的繋がり**を見いだすことを目的とする。その土地の空間や時間軸の中で、今の自分がどこに立っているのか再確認してもらう。ワークショップ参加者は、その農地に携わる方や地域の人々を対象とする。

九州大学農学部実験農場に寄贈済みの木彫（知足院美加子作）を10×10cm程度の不定形な立方体に分割。木彫をわざわざ使用する狙いは、一年間無意識のうちに鑑賞していた作品が、参加者それぞれの手を加えることによって「場」に繋がることを強烈に意識させるためである。

上面を今の自分、東面を未来の自分、西面を過去の自分、北面を（親を含む）先祖との繋がり、南面を次世代との繋がりとする。それぞれをちがう色面で着色、模様などを描く。着色には耐水性のあるアクリル絵の具を使い、できれば表面にFRP樹脂を吹き付けておく。立方体の底部には径10mmの木製の棒を差し込む穴をあける。その穴に「自分がその土地に関わった契機や、土地への思い」を記した『**場への手紙**』を挿入しておく。

立方体に木製の棒を差し込み、農道脇に設置する。その際、土地の方位とオブジェの方位をあわせる。農地の四隅に設置してもよい。（参加者の合意によって）

古代より食べ物を生み出す農地は信仰の対象であり、信仰対象となる偶像等が角に設置されることもあった。農地の脇または四隅に、自分の思いをこめたものが設置されていることで、見慣れた土地に特別な意味が生じるという効果を期待する。

木彫解体後の余った材は、できれば燃やす。その灰を土地に戻す。また、作品群も数年後に土地に埋める。人間が創り出したものは、最終的に土に帰さなければならない。作品が埋め込まれた土地は、その参加者の心といつまでも繋がることだろう。

■ワークショップ日程案 2006年3月中旬
(彫刻解体と製材はワークショップまでに済ませておく)

